

「唯一の正答」という呪縛



広田照幸

高校までの学校教育が、知らず知らずの間に生徒に教え込んでしまう、困ったことが一つある。それは、「問いには必ず正しい答えがあり、しかもそれは、ただ一つだけある」という誤った観念である。

定期試験でも入学試験でも、問いには必ず正しい答えが一つだけ設定されている。生徒の学力を点数化して測るためにはやむをえないやり方である。しかし、小学校から高校までの12年間、くり返し試験を受け続けていく中で、少くない生徒たちは、「正しい答え」を答えられるようになることが勉強の目標だ、と思うようになってしまう。

大学生と話をしていると、「何が本当は正しいんですか？」とか、「ではどうすればいいんですか？」と、簡単に「正答」を求めてくる。私は、「さあねー」とか「君の価値選択の仕方次第だよ」といったふうに答えると、はぐらかされたような怪訝な顔をする。

「問いには必ず正しい答えが一つだけある」というのは、きわめて特殊な事態である。世の中の出来事を見てみれば、それは多くの場合、あてはまらない。

複雑すぎて誰にも正しい答えが見つからない問いもあるし、価値判断の仕方次第で「正しい答え」が異なってくるような問いもある。たとえば、「温暖化問題と経済成長との関係をどうすればよいのか」は、万人が納得するような答えは見出されていない。「日本のこれからの政治はどうあるべきか」という問いは、論理的に導き出されるただ一つの正答があるわけではない。教育学の分野でもこの種の「問い」は少なくない。

そもそも、「正しい答え」が原理的に存在しないような問いもある。「自分が生きている意味はいったい何なのか」とか、「自由と平等はどちらがどれだけ優

先されるべきか」といった問いである。

数学の言い方を借りると、「解なし」の問いや、「条件付きの解」がたくさんあるのが、世の中の現実問題なのだ。

問いそのものがまちがえているようなケースもある。「どうやったらいじめを根絶できるか」という問いは、青少年の生きる世界の自律性を無視して、大人が無限に介入できるという錯覚のうえに立てられているため、解答不能な問いとなっている（「どうやったらいじめを減らすことができるか」という問いが正しい）。

大学で教えていてなかなか苦労することの一つは、学生たちを、「世の中のあらゆることについての問いには、必ずどこかに正しい答えが（一つだけ）あるにちがいない」、という思い込みから自由にさせることである。

難しいのは、「唯一の正答」を求める学生だけではない。「唯一の正答」という呪縛から抜けた時、「なんでもあり」という、正反対の極に振れてしまう学生もいる。事実や論理を積み上げていって妥当な見方をみんなで検討する授業でも、「人にはいろいろ考え方があるから……」と、すべてをご破算にしてしまうような発言をする学生がいる。真偽や善悪の問題が、個々人の趣味や好みの問題にされてしまうのである。

世の中のことには、「唯一の正答」はない。でも、「よりましな解答案」と「明らかにダメな解答案」というのがある。特定の見方の絶対化にも、無責任な相對主義にもいかずに、多様な見方の可能性に開かれた柔軟な思考を、どうすれば学生たちにしてもらえるようになるのか。なかなか難しい。

（ひろた てるゆき・日本大学教授）